

著者音韻を研究すること久しく、草稿已に筐に充つれども、未だ意に満つること能はず。因つて一首の悲詩を賦して、知友に示す。

講字論文已幾年、併將今古試攻研。秋風吹入書齋裡、亂稿成堆未作篇。
知友其稿を筐中に藏め置くことの非りるを説く。輒近騰寫術の進歩
せるを聽き、先づ此短篇の小部數を騰寫版に附して、發表せんと思
惟せしが、只其研究の結果の世人に知られざるを憾とし、偶之を松
堂堂主人に謀りしに、主人の俠氣具賣捌に當るを快諾せらる。因つ
て今當初の試験として、此書を上版することとせり。

大正丙寅初秋

著者 大島正健 識

自序

張麟之が韻鏡の序に其音韻圖の寓中、「實つるに廣韻玉篇の字を以てすと曰へり。廣韻は初宋の作なり。玉篇も亦宋版なるべし。其序文は即ち韻鏡の、廣韻玉篇の後に出でたる書りることを示すものなり。然るに又宋代に在りては、韻鏡の鏡の字は、具音翼祖の諱の敬の字の音に觸るるを以て、韻鏡の名を韻鑑に改めたりと云ふ。即ち鄭熊の韻鏡と七音略韻鑑、又張麟之の韻鏡と指微韻鑑と稱するが如し。是より推して考ふるときは、韻鏡は宋以前の作なりしこと明かなり。

宋の廣韻は唐の唐韻に増補を加へたる書なり。廣韻廣く世に行はれてより唐韻廢れ、後の人動もすれは唐韻と廣韻とを混同せんとするに至れり。張麟之が謂ふ所の廣韻は、其實或は唐韻を指せるに非ざ

るか。是れ人をして疑を起さしめし所なり。然るに先頃寫本唐韻發見せられ、著者其の翻刻せられたる者の一本を購ひ、精細に唐韻と廣韻とを比較し、其結果として、鄭樵の七音略韻鑑は唐韻に基き、張麟之の指微韻鑑は廣韻に據りて、作られたる者なることを探り出だせり。其穿鑿には、著者の多大の苦心を要したることを告白す。韻鏡と唐韻廣韻とは、大體に於いて其撰を同じうすと雖も、又中には其系統を異にするが如く思はるる者ありて、久しく疑の存する所なりしが、此篇に於いて其諸點を記して之を發表し、廣く識者の意見乞ふこととせり。

韻鏡には唐韻廣韻を離れて、往々遠き漢魏音の面影を留むるが如く見ゆる者あり、又唐韻廣韻とは別系の音の、古代より傳はり來り、韻鏡を通じて現はれたる者の、次第に後世に蔓延し、現代支那音に於いて、廣き範圍にて行はるる者あり。韻鏡の音は、支那當時の南

北兩音の何れに據りたるべきか、是亦未定の問題なり。第三轉と第二十五、第二十六兩轉の外轉なるは、確實に北音説を支持することを得れど、第三十一、第三十二兩轉の内轉なるは、南音説に力と與へて動かす可からず。第二十七、第二十八兩轉の内轉なるは、唐韻、廣韻とは、系統全く同じからず、此等の諸問題は、此篇に於いて細説する所なり。韻鏡既に唐韻、廣韻に據りたる上は、北音なるべしと斷する人もあるべけれど、陸方言の切韻の分類に先立ち、六朝時代南方に於いて、事實上是と同様の分類の、行はれ居りたる者ありしと無視すべからず。

陸氏の切韻即ち陸韻の編纂に従事したる八人の中には、南人の參與せる者もありたれば、當時の陸韻を以て、絶対に北音のみに據りたるものと考ふること能はず。又其上に南方に於いて久しく行はれ來りたる、習慣上の韻法も、許容せられたることなるべし。然れども

今つて陸韻と繼承したる唐韻廣韻の時代に至りては、南北兩音の別
 顯者なりしが如し。韻鏡は具間に介在せる、一種の方音に據りたる
 可きかと、考察せらるる所めれど、尚穿鑿を要すべき事多く、迷斷
 の見解は、此際先づ避くるを可しとす。

著者 大島正健 識

韻鏡と唐韻廣韻

大嶋正健

韻鏡の價值を知らんと欲せば、先づ其内容を考査し、横呼終聲の間に設けられたる音韻の法則を研究すること第一の要件なり。七音三十六字母、四聲二百六韻の配置、内外開合四十三轉の區別、開發收閉等位の差異につき、細かに辨識せば、其圖上に列記せられたる、當代の音韻の性質を窺ひ得るに至るべし。

筆者久しく韻鏡を學び、聊か悟り得たる所ありて、韻鏡音韻考、及び改訂韻鏡の二書と公にせしが、常に不便の地に住居して、良書に接する道に乏しく、磨光韻鏡を基礎とし、其他流布の韻鏡を参照として用ゐたるに由り、満足を得ざる所多かりしを遺憾とせり。其後

我國の韻鏡の原本なる享祿本を寫したる、元和本、寛永本、明暦本、寛文本等を購入し、且つ知友の助力に由り、享祿本に小訂を加へたる、永祿本の翻刻本と一見し、因つて窺ひ得たる享祿本を基礎として、更に考案を試みしが、筆者が原作者の意を忖度して、説明を施さんとする所の音韻の法則と一致せざる者多きは不審に堪へざりし所なり。

享祿本は南宋の張麟之が韻鏡を翻刻したる者にして、永祿本は原本に由りて之を訂正し、僅かに二十字程の差異あるのみにて、その確實なるを證するを見れば、享祿本は大體に於いて其原作の宋本と一致するものと見る可なるべし。因つて考ふるに、此書に音韻配置の原則に叶はざる不審の點多きは、全く後世の宋音の混入したるに基因するものの如し。故に不審の點百五十餘ヶ所の字を挙げ、主として廣韻集韻に徴し、傍玉篇と切韻指掌とを引きて、これが訂

正を試み、原版韻鏡校訂と題する一篇を草せり。原版とは我國の原本といふ意義なり。

其後鄭樵の通志略中にある、七音略韻鑑を得、此書を基礎として、更に考査を施したるに、忽ち旭日の光輝を放ちて、雲霧の消散するが如く、多年の疑惑自ら晴れて、衆説の當否を確かむることを得たり。蓋し偶然の暗合なりとは言ひ難かるべし。鄭樵は北宋より南宋に跨る時期の人なれど、七音略は古書を寫したるものと見え、遠き唐代の音韻の面影を留め、根柢之が舊に比すれば、遙かに勝りて信頼すべき良書なりとす。是より以下享祿本に寫したる張麟之が韻鏡を張本、鄭樵が七音略韻鑑を鄭本と略記すべし。張本に宋音を混入したるは、原作の韻鏡に對しては、誤謬と稱せざるを得されど、時代音としては、宋代の音を示し、音韻の變遷を探る副産物としては、其價值尠からず。尚之と集韻、禮部韻略、切韻指掌等と相比し

隋唐の二百六韻より、次第に南宋の百七韻に移り行く跡を探り得べしと雖も、其は別問題なるが故、此處に論ぜざるべし。

鄭本尚疑問を留むる所ありて、更に之を考査したるに、集韻の感化を受けたる、宋音の混入せるを發見せり。因つて一々正して之を除きすれば、残るは廣韻との對照にして、大體は能く音韻配列の法則に合ふ。尚一致せざる者あるときは、韻鏡と廣韻と、其原音を異にする者ありと見るより外辯明無かるべし。韻鏡の價值としては、鄭本の張本に優れること言ふまでもなし。然れども是れがため張本捨つべきに非ず。中には張本正しくして、鄭本誤まれる所、往々これあると見る。故に兩本を合はせて、之を廣韻と比較し、而して後取捨を行はば、理想の韻鏡を得るに近かるべし。

張本の序文に、韻鏡の爲中「實つるに廣韻玉篇の字を以てす」とあり。玉篇は姑く措き、韻鏡は果たして廣韻を基として製作せられた

るものなるべきか。當時唐韻と廣韻とを混同し、其別を立てずして、其名を用ゐたることあり。康熙字典の序文に「於唐則廣韻」と記せり。唐韻と廣韻と同じからざるは、今の學者の均しく知る所なり。廣韻は唐韻に増補を加へたる書なること明かなり。唐韻は唐の天寶十年孫緬が陸法言の切韻を訂正せし書にして、廣韻は宋の景德四年詔を受け、大中祥符元年大成したる、陳彭年等が唐韻を増補したる書なり。鄭本張本の共に廣韻の字を借り用ゐたることの多きは、疑ふべき所に非ずと雖も、其原本は廣韻に非ずして唐韻に據りたるには非ざるか、是れ尚餘す所の問題なりとす。

廣韻行はれてより、唐韻廢れて、久しく其形を藏し居りたるが、近頃に至り寫本唐韻の發見せられたるあり。此珍書名づけて唐韻と稱すと雖も、其内部を考證すれば、實は孫緬以前の書にして、陸韻を寫したるものなるべしと云ふ。此書平聲と上聲とを缺き、去聲の大

部と入聲の全部とを備ふ。然れども其の殘存せる者より推し、能く大體を窺ふことを得べし。韻鏡の原本の廣韻に非ずして、唐韻に據りたるべき形跡あるは、凡の事實に由りて證明することを得べし。是より廣韻と寫本唐韻との、韻の配列の順序を比較すべし。平聲、上聲は去聲入聲より先すべきものとす。

廣韻去聲順序

- 第一、送、第二、宋、第三、用、第四、絳、第五、寘、第六、至、第七、志、第八、未、第九、御、第十、遇、第十一、暮、第十二、審、第十三、祭、第十四、泰、第十五、卦、第十六、怪、第十七、夬、第十八、隊、第十九、代、第二十、廢、第二十一、震、第二十二、稊、第二十三、閉、第二十四、焮、第二十五、願、第二十六、恩、第二十七、恨、第二十八、翰、第二十九、換、第三十、諫、第三十一、禰、第三十二、霰、第三十三、線、第三十四、嘯、第三十五、

笑、第三十六、效、第三十七、號、第三十八、箇、第三十九、過、
第四十、禍、

唐韻入聲順序

第一、屋、第二、沃、第三、燭、第四、覺、第五、質、第六、術、
第七、櫛、第八、物、第九、迄、第十、月、第十一、沒、第十二、
曷、第十三、末、第十四、黠、第十五、鎋、第十六、屑、第十七、

薛

唐韻は去聲第一より第八に至り、又第二十より第二十五まで缺く
と、第一、送より第四十、禡に至るまで、廣韻と同一と見做し置く
べし。其中霽、祭、泰は、廣韻にては、第十二、第十三、第十四の
順序なりと、唐韻にては、第十三、第十四、第十二の順序なり。入
聲は第一屋より第十七薛に至るまで廣韻、唐韻全く同じ。

廣韻

唐韻

廣韻

唐韻

一二

去聲

入聲

第四十一

第四十三

漾

第十八

第二十九

藥

第四十二

第四十四

宕

第十九

第三十

鐸

第四十三

第四十五

映敬

第二十

第二十一

陌

第四十四

第四十六

諄

第二十一

第二十

麥

第四十五

第四十七

勁

第二十二

第十九

昔

第四十六

第四十八

徑

第二十三

第十八

錫

第四十七

第五十五

證

第二十四

第三十一

職

第四十八

第五十六

證

第二十五

第三十二

德

第四十九

第四十九

宥

第五十

第五十

候

第五十一

第五十一

幼

第五十二	第五十二	沁	第二十六	第二十八	緝
第五十三	第四十一	勘	第二十七	第二十二	合
第五十四	第四十二	關	第二十八	第二十三	盍
第五十五	第五十三	豔	第二十九	第二十六	葉
第五十六	第五十四	禡	第三十	第二十七	帖
第五十七	第六十	顰	第三十三	第三十三	業
第五十八	第五十七	陷	第三十一	第二十四	洽
第五十九	第五十八	鑑	第三十二	第二十五	狎
第六十	第五十九	梵	第三十四	第三十四	乏

廣韻の方け去聲と入聲と能く相對次し、其番號に狂と生じたる口、去聲第五十七、第五十八、第五十九に對する、入聲第三十三、第三十一、第三十二の三ヶ所のみなり。唐韻の方け、去聲第四十一以下に對する、入聲の位置は甚だ不同りるが、其理由を詳かにすること

能けず。去聲の方、廣韻と唐韻と、其順序の韻を異にせるは、第四十以下りりとす。平聲も上聲も悉らくは去聲に準ずることなるべし。次に韻鏡の張本と鄭本との轉數の順序を對照すべし。各韻に前の例に従つて、去聲と入聲とのみを擧ぐ。第一轉より第三十轉に至るまで、兩者全く同一りるが故省略す。

張本

鄭本

第三十一 第三十四 宕○様○ 鐸○藥○
第三十二 第三十五

第三十三 第三十六 ○敬○勁○ ○陌○昔○
第三十四 第三十七

第三十五 第三十八 ○諄○勁○徑○ ○麥○昔○錫○
第三十六 第三十九

第三十七 第四十 候○宥○幼○

第三十八 第四十一 ○○沁 ○○緝○

第三十九 第三十一 勘陷豔標 合洽葉帖

第四十 第三十一 關鑑韻豔 盍狎業葉

第四十一 第三十三 ○○梵 ○○冬 ○

第四十二 第四十二 澄○證○ 德○職○

第四十三 第四十三

筆者始めて鄭本に接したるとき、普通の韻鏡を見慣れたる目にては、其順序の異様なるを怪しみたりしが、今之を唐韻に比するに及びて、鄭本は全く唐韻に據りたる者りる事を發見せり。第三十一、第三十二の兩轉、振本の宕様の位置に、鄭本にては勘陷豔標と關鑑韻豔とを配したるは、廣韻の第四十一漾、第四十二宕に對して、唐韻にて第四十一勘、第四十二關を配したるに同じ。則ち勘を基として、之に同類の脣韻、第五十七陷、第五十三豔の一部、第五十四標と

組み合はせて、第三十一轉の去聲に作り、又闕を基として、之に同
 類の屑韻、第五十八鑑、第六十鑑、第五十三鑑の一部を組み合はせ
 て、第三十二轉の去聲に作りたるなり。第五十九梵に右の諸韻に録
 故ある屑韻なれば、第三十三轉を組成して、其次に位せしめたるな
 り。次に廣韻と唐韻とに第二位の差にて相對し、廣韻に第四十一より
 第四十六、唐韻に第四十三より第四十八に亘り、此等の喉韻に對
 して、張本に第三十一より第三十六に連なる諸轉、鄭本に己に第三
 十一、第三十二、第三十三の三轉を繰り上げたれば、第三十四より
 第三十九に連なる諸轉を配置せり。候有幼を收めたる、張本の第三
 十七轉は、鄭本の第四十轉に同じく、廣韻、唐韻第四十九、第五十
 、第五十一相合す。沁を收めたる張本の第三十八轉は、鄭本の第四
 十一轉に同じく、廣韻、唐韻第五十二亦相合す。廣韻、第四十七、
 第四十八、唐韻第五十五、第五十六の澄澄を收めたる、第四十二、

第四十三の兩轉は、張本、鄭本相同じ。入聲は廣韻に比すれば、唐韻の方具順序不規則なれど、韻鏡にては、夫々之を諸轉の適當の位置に配布せり。

上に述べ來りたる如く、鄭本の原書は唐韻の順序に従ひ、勑闕の兩韻を基とし、沁梵の外、他の唇韻を包括して兩轉と爲し、梵カ轉を其次に置き、宕樣、敬勁、諄徑の喉韻の諸轉を其下に列ね、候宥幼の轉沁の轉を之に従はしめたり。其次に列なれる唇韻は、已に繰り上げられたるに由り、殘るは澄證を收むる兩轉と爲れるなり。是れ平聲登蒸、上聲等拯、去聲澄證、入聲德職を收むる、第四十二、第四十三兩轉の、韻鏡の末尾に位せる理由なりとす。

廣韻は唐韻を改め、勑闕を移して、下の沁と豔との間に入れて、唇韻を順次に列ね、又澄證を徑の下、宥の上に上げて、喉韻の列に位置せしめたり。張本の原本は、廣韻に従へること明かにして、各轉の

順序、大略之に據りたるを見るなり。然るに證據を收めたる兩轉は、
 詩徑を收めたる第三十六轉に續きて、第三十七轉、第三十八轉と
 爲すべかりしこと自然なるに、却て第四十二轉、第四十三轉として
 、末尾に存せしむるは、不用意にして唐韻に則れる。舊本に従へる
 ものと謂ふべし。

韻鏡既に唐韻に據りたるものとすれば、其の廣韻以前の書なりしこ
 と論を要せず。唐韻と廣韻とは、唐の玄宗の時代より宋の眞宋の時
 代に至るまで、二百五十餘年に亘る間隔あり。この長年月は、韻鏡
 の産出の時期と定むるに、幾多の推測を容るべき餘地あるなり。考
 證に用ゐたる寫本唐韻は、陸法言の切韻を寫したるものなるべしと
 之へば、時代古きに過ぐるが如く思はるるに由り、韻鏡は孫愬の唐
 韻に據りたるものと考ふる方、事實に近かるべしと思はるる所あり
 。宮、商、角、徵、羽に半徵、半商を加へたる音律に則り、五音の

七音に移りたるは、其時期晚唐の頃なりといへば、七音韻鏡の製作は、七音三十六字母の、定まりし後なりるべかりしこと明かなり。三十六字母と、二百六韻とは、韻鏡の據つて以て其考案を立てたる所の材料なりとす。

韻鏡は他の韻書を基として製作せられたる者なりべしと雖も、其活用の考案自ら別なりとす。其の特殊の用意左の如し。

一、韻を經とし、音を緯として、直横四を作れること。

二、同系、異系の韻を配合分列して、四十三轉を設けたること。

三、内轉外轉の別を立てたること。

四、開轉合轉の別を立てたること。但し七音略に見ゆるが如く、當初は開合の別を立てずして、輕重の別を設け、開合は其中に含めたること。

五、平、上、去、入の各聲に、直拗四等の別を設けたること。

六、同韻と兩轉に跨らせて、其字母を一方の第三等と他方の第四等とに配置し、輕重の別を立てたる者あること。

張麟之は韻鏡を以て反切の用を便する切韻圖と爲せり。寛永以後其研究に従事したる我國の學者、亦之を同様の書と見做したる者多く、降つて今日に至るも、尚此說を主張する者あり。鄭樵は韻鏡の古本を得て、一唱三歎し、梵儒其妙義を傳へて、華儒之を受けたるものとせり。されば此書は悉曇の道に精しく、子音母音の介解結合の綴字法を明かにしたる者の作なるべければ、横を子音、縦を母音（韻）と爲し、迂遠なる反切法に由らずして、直ちに音韻の結合を辨知する簡法を案出したるものなるべし。筆者は磨光韻鏡の著者と共に、韻鏡の切韻圖に非ざることを確信する者なり。支那人は綴字法を解せざるが故に、音韻を介解すること能はず。因つて一字を擬す毎に、切母及び助紐歸納を用ゐ、三折總べて一律に歸すと云ふか如

さ、窮蹙する反切法に據るに至れるなり。之を支那人の手にのみ委ね去れば、音韻配置の巧妙なる韻鏡も、空しく切韻圖と化し了るべし。

韻鏡の原本は唐韻に據りたるべきこと、確定の事實なりとせば、次に起るべきは、韻鏡は唐韻と全く具音を同うしたりしや否や、即ち其産地を決すべき問題なり。從來韻鏡に關しては、南音説、北音説の兩論あれど、之を決せんとせば、其當時の外部の事情よりも、其内部の音韻の性質につき、之を精査すること最も肝要なるべし。是より韻鏡と唐韻との異同を検し、その顯著なる事實のみを擧げて之を列記すべし。實例には廣韻を以て唐韻に代用す。

第一、音の性質に現はれたる韻鏡と唐韻との異同

具一

筠。は廣韻爲贊切にして眞の韻類。は廣韻于敏切にして軫の韻に屬する

字なり。韻鏡は此二字を第十七轉の方に置かすして、第十八轉の方に
 に入る、即ち鎬は鎬の韻、殞は準の韻に移る格と爲れり。

脛は廣韻莊緣切、脛は廣韻山員切にして、共に仙の韻に屬す。韻鏡
 此二字を正齒音に従つて、第二十二轉の第二等に置く、即ち山の韻
 に入る格と爲るなり。

反切法にては此類は憑切の中に入れど、韻を換ふるに至りては說
 明困難なるものと爲るなり。是れ切韻指南にて正音憑切と唱ふる者
 に屬す。韻鏡は直ちに直横圖に由りて、簡単に音韻を定め、其結果
 往々廣韻と一致せざることをあるなり。

右は韻鏡と廣韻と、韻を異にせる例なり。

其二

兵は廣韻甫明切、甌は廣韻符宵切にして、其切字は、共に輕唇音に
 屬す。其歸字の韻字に従ひ、且つ重唇音と爲ること、反切法にて

互用と稱するものなり。韻鏡にては、兵。口第三十三轉、平聲三等幫
 母、靚。口第二十六轉、平聲四等並母の下に位し、共に重唇音に屬す
 。兵。口玉篇にては彼榮切、集韻にては補明切、靚。口玉篇にては嫌遙
 切、集韻にては毗宵切にして共に重唇音りること韻鏡に同じ。
 椿。口廣韻都江切、間。口廣韻古閑切にして、其切字口直聲の一等字な
 り。其歸字の、韻字に従つて拗聲と爲ること、反切法にて類隔又は
 憑韻と稱する者なり。椿。口玉篇、陟江切、集韻、株江切、間。口玉篇
 、集韻、居閑切にして、共に音和正法の拗聲の字なり。韻鏡にては
 、二等字は總べて無條件の拗聲りること、玉篇、集韻の例と能く相
 一致す。廣韻の、二等字に對し、切字直、韻字拗の反切を用ゐるこ
 と、其歸字の聲、我漢音に似たる所ありたるが如し。切字直、韻字
 拗の反切と、切字拗、韻字拗の反切とは、其歸字に於いて本來響の
 異りりたる所ありたるに相違無けれど、後世の人韻圖を按し、之に

合はざる反切あるとき、唯煩雜なる名稱を設けて、區別を立つるのみにして、反切の正法と變法との間に、其聲に差異ありたるべきを悟り得ざるなり。廣韻の用ゐる所、韻鏡に照せば、變法と爲る者あり。是れ韻鏡の廣韻と一致せざる所なり。尚三等四等字にも、切字直、韻字拗、又切字拗、韻字直にして、歸字の、切字の音又韻字の韻を借りて、憑切又憑韻と爲る者多し。かゝる場合に於いては、反切のみに由りては、全く其聲位と判じ難し。故に又後世其反切に様々なる名稱を設けて區別を立つれど、韻鏡にてもは左様なる煩あることなり。

右は韻鏡と、廣韻と、其音を異にせる例なり。

其三

篇。は廣韻芳連切、勁。は廣韻居正切にして、共に音和正法の拗聲なり。篇。は玉篇匹連切、集韻批延切、勁。は玉篇吉聖切、集韻堅正切にし。

て、玉篇は双方切字直、韻字、拗の憑切の直聲、集韻は上は音和法の直聲、下は憑切の直聲なり。韻鏡にては、兩字第四等に位し、直聲にすべきこと論無し。然るに廣韻の反切に従へば、兩字韻鏡の三等に位すべき格と爲るなり。

右は韻鏡と廣韻と其等を異にせる例なり。

其四

傍は歩光切、満は莫干切、獲は居縛切、麤は下没切、志は於避切にして、切字若しくは韻字に唇音あるときは、廣韻の反切のみに由りては、開合を辨知すること甚だ難し。然るに之を韻鏡に徴すれば、傍は第三十一轉、並母、唐の韻にして開、満は第二十四轉、明母、禪の韻にして合、獲は第三十二轉、見母、藥の韻にして合、麤は第十七轉、匣母、沒の韻にして、開、志は第五轉、影母、眞の韻にして合と、一目瞭然として、直ちに決することを得るなり。

縣。口黃練切、端。口多官切にして、開合口切字に由るべきか、若しくは韻字に由るべきか定め難し。之を韻鏡に徴すれば、縣口第二十四轉、匣母線の韻合、端口同轉端母桓の韻合と、速斷することを得べし。

烏。口哀都切、阿。口烏何切、駕。口於表切、勾。口矣倫切、煙。口烏立切にして、廣韻にては、喉音の中には開合明瞭ならざる者ありたるを見え、切字の用法一定せず。之を我國の假名に應用するとき、從來學者の判斷に苦しみたる所なり。韻鏡は其の定めたる音韻判然として、反切法に據るが如き迂遠の道を取らず。烏。口第十二轉、影母模の韻合、阿。口第二十七轉、影母歌の韻開、駕。口第二十二轉、影母元の韻合、勾。口第十八轉、喻母諄の韻合、煙。口第三十八轉、喻母緝の韻開なり。

右に開合判別法の、韻鏡と廣韻と異なれるを示す。廣韻は反切を以

て各字の發音を示すのみにて、開合の別を立てず。其發音の結果に由りて、開合自ら分れ、韻を別にする者あるに至れるなり、かかる事實を承認するとき、韻鏡と廣韻とに差異を生ずる事ありたりとするも、別に奇とするに足らざるなり。

以上に擧げたるが如き差異ありと雖も、大體に於いては韻鏡と唐韻と相一致し、共に能く唐代の音を代表す。唐韻廣韻に比すれば、玉篇（宋版）、集韻の方、其音韻鏡に相近く、或は全く相同じき者多きは、初唐より晚唐に向ひ、次第に支那音の上に變遷あるを窺ひ得べし。韻鏡の據りたる音は、其勢擴大して宋代に傳はり、玉篇集韻の音は、之に接し來りたるものの如し。是れ韻鏡を以て、晚唐の作と爲す傳説に、大なる力を與ふるものなり。廣韻は其儘唐韻を繼承して、之を増補したるに止まるものなれば、初宋の時代音に則らざりしものと考ふる方可なるべし。

第二、韻の性質に現はれたる韻鏡と唐韻の異同

其一

一 二 三 四

一 二 三 四

一 二 三 四

一 二 三 四

痕 臻 眞

很 軫 軫

恨 震 震

沒 櫛 質

魂 諄

混 準 準

慁 惇 惇

沒 術 術

山 元 仙

産 阮 獮

禰 願 線

鑑 月 薛

韻鏡の第十七轉にて、平聲には一等に痕、二等に臻、三等、四等

眞、上聲には、一等に很、三等、四等に軫、去聲には一等に恨、三等

、四等に震、入聲には一等に沒、二等に櫛、三等、四等に質と配し

又第十八轉にて、平聲には一等に魂、三等、四等に諄、上聲には

一等に混、三等、四等に準、去聲には一等に恩、三等、四等に樟、入聲には一等に没、三等、四等に術を置けるを見るに、我か常呼の音より推して考ふるときは、一等韻と二等以下の韻とは、全く其習を異にし、聯絡無きが如く思われて、其配置を理會するに苦しむ。然れども、此配置は韻鏡製作當時の音を基としたるものなりべければ、今音のみの上より押して、擬す可からざる理由あることは、素より論無し。

今先づ文字の系統同じくして、今音と古音と異なる者を擧げて對照すべし。第十九、第二十兩轉所屬の者も、其音脈同系に屬するものと知るべし。

穩	オン	憲	イン	損	ソン	員	ヤン
艮	ゴン	銀	ガン	坤	コン	申	シン
論	ロン	輪	リン	尊	ソン	遵	ジュン

屯 トン 純 ジュン 通 トン 盾 ジュン

敦 トン 諄 シュン

溫 ラン 盪 ウン 魂 コン 云 ウン

渾 コン 單 グン 貢 ホン 墳 フン

門 モン 問 ブン 盆 ボン 分 ブン

今音にてはオンの聲と、イン、ウンの聲との間に、差異あれど、古音は然らざりしこととるべし。漢魏の古韻にては、前に擧げたる一等韻と、他等の韻とは、混用にして往來したるを見れば、其聲の同じかりしか、或は近かりしこと、疑ふべき所に非ず。

試に漢魏の作家の詩歌頌賦の類より抜いて今韻と異なる古韻の用例を示すべし。

班固西都賦

建金城之萬雉、呀周池而成淵、披三條之廣路、立十二之通門、

下。千。分。と。押。了。千。口。古。韻。に。て。は。眞。と。同。韻。

崔駰大理箴

昔。在。仲。尼。哀。矜。聖。人。子。罕。禮。刑。衛。人。釋。艱。
下。文。門。遵。民。念。殷。單。素。身。と。押。了。艱。は。恨。の。平。聲。

曹昭東征賦

悵。容。與。而。久。駐。兮。忘。日。夕。而。將。昏。至。長。垣。之。境。界。兮。察。農。野。之。居。民。
上。勤。人。下。榛。神。云。墳。存。賢。と。押。了。賢。は。眞。
同。韻。

李尤函谷關賦

季。未。荒。成。隨。闕。有。年。天。閔。羣。衆。命。我。聖。君。
下。文。勛。循。門。環。奔。論。坤。と。押。了。年。は。眞。と。同。韻。
環。は。別。韻。

馬融廣成頌

按隊案部、爲前後平。甲乙相伍、戊己爲堅。

上山。上押丁。堅。日真與同韻。山日別韻。

趙壹窮鳥賦

鳥也雖頑、猶識舊恩。內以書心、外以告天。

天。日真與同韻。

蔡邕七依

乃命長秋、使驅獸夷、羿作虞人、騰句喙以逐飛。騁韓盧以逐奔。

吉鼎雁門太守行

孝和帝在時、洛陽令王君、不自益州、廣漢蜀民。

下。論。溫。賢。民。仁。貧。端。門。年。論。上押丁。端日別韻。

韻。

魏武帝短歌行

越陌度阡、枉用相存。契闊談讌、心念舊恩。

阡。口眞と同韻

劉楨贈從弟詩

鳳凰集南岳、裴徊孤竹根。於心有不厭、奮翅凌紫氛。

同 魯都賦

旁屬四邑、延干休溷。冠蓋交錯、隱隱麟輶。

徐幹齊都賦

矜殷襲夏、壯氣無倫。凌高越險、追遠逐邇。

晉の時代に入り、尚古來の韻法に従ひたる例ありと雖も、次第に變化の生じたるを見る。

陸機吳大帝賦

承靈伊何、克聖克仁。茂對四象、克配乾坤。

同 漢高祖功臣頌

百王之極、舊章匪存。漢德雖朗、朝儀即昏。

下、尊。門。毘。と押す。

潘岳西征賦

匪擇本以棲集、歟林焚山鳥存。遭千載之嘉會、皇合德於乾坤。

下、思。門。と押す。

左思蜀都賦

却背萃容、北指崑崙。緣以劍閣、阻以石門。

下、奔。昏。と押す。

劉琨答盧諶詩

郁穆舊姻、嫵婉新婚。不慮其敗、惟義是敦。

下、奔。門。根。魂。と押す。

石の例に由って、晉初の頃より、後世の陸韻の痕魂の基と爲るべき韻の、獨立したる痕迹を認むべし。此時代には亦魂末の頃まで、籍を同じうせし眞諄の韻と、欣文の韻との分裂起り、三類の韻、其方

を異にして進み行くに至れるなり。即ちこの三類は音聲の上に變化を生じたるなり。我吳音にて隱とオン、近とコン、をとコツと呼ぶが如きは、分裂以前の音を示すものの如し。

晉末宋初に至り、痕魂の韻は全く固定せり。

陶潛歸去來辭

乃瞻衡宇載欣載奔、僮僕歡迎稚子候門。

下、存、縛と押す。

謝靈運、入彭蠡湖口詩

客游倦水宿、風潮難具論、洲島驟近合、圻岸屢崩奔。

下、蓀、屯、昏、門、存、魂、溫、敦と押す。

入聲の方は、諧聲字の組織を見るに、同類の入聲のみならず、他聲とも通ひたり。

汨　コッ　日　ジッ　咄　トッ　出　シユッ

乾 コツ 乞 キツ 忽 コツ 勿 フツ

訥 トツ 内 ナイ 勃 ホツ 字 ハイ

入聲の方口證例乏しと雖も聊か其變化の迹を原めべし。

漢書敘傳

元元本本、數始於一、產氣量鍾、造計秒忽。

馬融、長笛賦

波瀾鱗淪、窅隆詭戾、潏潏噴沫、奔潏碭突。

曹植、七啓

翔爾鴻鵠、戢然鳬沒、縱輕體以迅赴、景追步而不逮。

華虞、鸛鵲賦

其在水也、則巧態多姿、調節柔骨、一低一仰、乍浮乍沒、或遊或

舞、續翻倏忽。

潘岳、西征賦

出申威於河外、何猛氣之咆勃、入屈節於廉公、若四體之無骨、

袁宏三國名臣序贊

周昌梗概臣、辭達不爲訥、沒黜社稷器、棟梁天表骨、

下、杭、勃、沒と押す、

是亦音初の頃より、沒の韻の表現して、次第に固定するに至りたるを示す。是と時を同じうして、同類の入聲より、質術と、乞物と、兩類の韻分れ出でて後固定するに至れるなり。沒の韻と共に質術の韻と乞物の韻との分れ出でたるは、他の平、上、去三聲の韻の分れ出したる者と能く相對次す。

韻鏡にて痕魂の韻と、眞諄の韻とを、同轉の中に收めたるは、時違かに隔たりと雖も、確かに漢魏音の系統を示すものなり。因つて唐代の音は、漢魏音に比すれば大に變化せりと雖も、韻鏡は古音の系統の、尚殘存せる地方に於いて製作せられたるものと考ふること

を得べし。陸韻、唐韻を繼承せる廣韻にては、痕魂と眞諄とを同用と記せず。又絶律の如き格式の定まりたる唐人の詩には、痕魂の韻所屬の字の、眞諄の韻所屬の字に混すること、至つて稀なりとす。是れ韻鏡は唐韻を借ること多しと雖も、兩者其の基く所の音の由來に於いて、差異あるを語るものなり。然らば切韻指掌にも、切韻指南にも、韻鏡と同様なる痕魂眞諄の韻の配置あるに依り、或は是にも亦同様の説明を施すべきかと問ふ者あるべし。兩者の如きは韻鏡と基としたるか、或は別の原圖ありて、之に據りたるものか、改造の迹歷々として見るべく、一は宋代の音に當て、一は元代の音に對し、正音の標準を示さんと試みたる者にて、唐代音に比すれば、音韻の法則に合はざる者甚だ多し。中には形式上の配置のみにて、其理由の解し難き者もありて、その音韻排列の秩序の整然たる、韻鏡に比すべくも非ず。故に之に向つて同様の解釋を施すべき要無し。

韻鏡の第二十一、第二十二の兩轉にて、平聲には二等に山、三等に元、四等に仙、上聲には二等に産、三等に阮、四等に獮、去聲には二等に禰、三等に願、四等に線、入聲には二等に鑑、三等に月、四等に薛を配するを見れば、三等の元、阮、願、月は、二等の山、産、禰、鑑と、四等の仙、獮、薛との間に位して、兩者に近親の縁故ありたるを知るべし。第二十三、第二十四兩轉の、寒、旱、翰、曷、桓、緩、換、末、刪、潜、諫、黠、先、銳、霰、屑も亦密接の關係ありたるなり。

右の四轉所屬の字は、漢魏の古韻にては、互に往來して、殆ど無差別なりしも、時を追ふに従ひて、次第に分れ來りし迹あり。元、阮、願、月の韻の現出に就いては、作例多きが故、只顯著なる例を擧げ、煩を避けて、韻脚のみを示すべし。漢は略して魏より始む。

曹植贈徐幹詩

山繁開閭天軒。憐全篇愆然宣言。

同 雜詩

劉楨贈徐幹詩

阮籍詠懷詩

陸機日出東南隅行

同 漢高祖功臣頌

潘岳贈陸機詩

張協七命

左思蜀都賦

同 吳都賦

同 魏都賦

孫綽遊天台山賦

陶潛詠貧士詩

軒。原。閑。元。山。言。

垣。宣。言。還。園。源。翻。連。懸。偏。焉。

干。言。輦。寒。軒。餐。歎。

端。顧。關。輪。餐。言。紉。瑗。瀾。繁。軒。丹。輝。蘭。盤。

鸞。源。懽。湍。歎。

言。歎。蘭。韓。權。原。安。難。藩。

延。遷。言。軒。

薦。鮮。弦。軒。繁。

晚。遠。坂。滌。

漫。館。建。苑。衍。

紛。尊。山。門。軒。蕃。衍。

間。玄。幡。言。然。

軒。園。烟。研。言。賢。

顏延之元后哀策文

謝靈運石門新營詩

鮑照代東武吟

右の諸例にて示せるが如く、劉宋の頃に至つて、元の韻現出し、是と同時に痕魂の韻は之と同用と爲り、是より兩者常に相伴ひて、他の韻と雜へず、遂には痕魂は元と併用せらるるに至れり。

入聲の韻の變化も、他の三聲の韻と粗同様なり。

曹植洛神賦

月。雪。

傅玄怨歌朝時篇

月。髮。越。關。達。發。曷。聞。未。別。裂。絕。穴。

張協七命

越。月。發。血。滅。

同 雜詩

越。髮。設。月。別。節。察。

顏延之赭白馬賦

髮。月。發。沒。關。越。

謝靈運遊赤石進帆海詩

歇。沒。髮。發。月。越。關。忽。伐。

園。轅。軒。原。謹。援。

門。捫。繁。敦。樽。翻。讓。猿。暇。奔。存。魂。論。
言。恩。源。垣。奔。溫。存。論。門。豚。猿。怨。軒。魂。

劉宋の頃に至りて、月の韻現出し、没の韻の之と同用と爲れるを示す。

以上に述べたるが如く、元の韻と痕魂の韻と、又夫々その上聲、去聲、入聲の韻の混用せらるるに至りたるは、元の韻の方に音變化の生じたることとして容易く説明することを得べし。是れまで行動と共にしたる、他の韻と離れたるは、其變調に基由したるべきこと言ふまでも無し。されど又更に痕魂の韻と同用と爲れるに於いては、別に説明無かる可からず。我吳音の讀方に從ひ、翻をホ、頰をホ、建をコン、言をゴン、園をラン、怒をラン、發をボ、越をラ、テと呼ぶが如く、此系の韻にオの聲を與ふれば、痕魂系の韻と、自然に相往來すべきものと考へ得らるること難からず。我吳音は南音も寫したるものなれば、此説明劉宋以後の南音の變化に該當すべし。然るときは元の韻は、痕魂の韻と共に内轉に入るべき性質の者と爲

るなり。韻鏡の元の韻はオン、オツの聲に非ず。元、阮、願、月は、同系の山、産、禪、鎔及び仙、獮、線、薛と共に、外轉の中に在し、遠く漢魏音本系の後を存續せり。

韻鏡と異なりて、陸韻、唐韻を繼承せる廣韻にては、痕魂の韻を元の韻と同用と爲せり。廣韻は北音なり。故に南音に對して施せる我、吳音の説明は之に適合せざるべし。我漢音にて翻煩をハン、建をケン、言をケン、圉怨をエン、月をケツ、越をエツと呼ぶが如く、元、阮、願、月の韻をアン、エン、アツ、エツの聲を以て記し、痕魂、恨、混、恨、恩、沒の韻は、改むること無くして、オン、オツの聲を以て寫し、兩系の異りたる韻を、同韻に用ゐ、別に怪しむ者も無きは、我國の作詩家の、音韻の道に無頓着なるに、驚かざるを得ず。韻鏡にては元、阮、願、月の韻は漢音に類似し、痕魂の類とは縁故淺かりしが如し。故に韻鏡の音は漢魏音の系統に屬するものなり。

と言ふことを憚からざれど、是れのみにては、之を北音なりとも南音なりとも断じ難し。只其當時の南音系に屬せざりしことを主張するのみ。其は兎も角も、爰に一大疑問と爲るべきは北方の人の用ゐたる韻法も、亦南方の人の韻法と同一なることなりとす。

庾信周宗廟歌

虞世基出塞詩

唐詩も同韻法を繼承せり。

魏微述懷

張九齡登高安南樓言懷

韋應物侍李博士詩

言。奔。傳。燭。
翻。昏。尊。恩。魂。原。門。軒。煩。源。

軒。存。門。藩。原。猿。魂。恩。言。論。
軒。繁。瞰。喧。樊。村。諼。原。言。恩。奔。論。存。
關。發。歇。月。越。忽。

元の韻は北音にては、其當時の音、我漢音に類するものと見て、大差無かるべし。是れ漢魏音系に屬する音なり。痕魂の韻をオンの聲にて呼ぶも、亦均しく、漢魏音系の音なり。兩者の原音は、全く同

じからず。北地にて元の韻に、南音の如き變化の起らざりし上は、
痕魂の韻と同用として、詩歌の上に現はれたること、其理由を探ら
ざるを得ず。

隋朝の時、主として北地の時代音を標準として、二百六韻は制定せ
られ、唐朝にては文物制度の大革新に伴ひ、詩歌の格調及び形式の
上にも、大變化を生じたるは争ふ可からざる事實なるか、されども
詩歌の如きは、其着想の内容には、大刷新を生ずることありと雖も
、之を表はすに、直ちに時代音を用ゐるが如きは、流調なる者の外
は激變に過ぎ、作者の容易に行はざるを以て常とずる所なり、隋唐
の二百六韻の如きも、其大別は六朝の中期以後に、既に成就せられ
たるものなり。文物燦爛たる南朝の遺風を承け、其詩歌に由りて綴
練せられたる詩人は、時代音に據ることの般風景なるより、古調に
由ることの風韻あるを尊重したることなるべし。故に二百六韻には

、南音の分類も、大に加味せられたることと考ふべし。詩歌の韻法として、傳へられたる者、時代音に令けざる所あるは、今も尚然りとする所なり。故に詩歌は其韻と其呼法と一致せざること、往々これあるは、古今同一なるべし。元の韻と痕魂の韻とは、六朝の中期に於いて和合したるものなるが、其南音其儘北地に移し傳へられ、北音とは一致せざる所ありたるも、尚同用として詩作の上に行はれたるものなるべし。

元の韻に化せられて然るか、或は其以前よりなるか、北地にても、何れの時代なるか、音變化の生じたるものと見え、現代支那音に於いて見るが如く、痕魂の韻にアン、エンの聲を與ふる呼法あり。この呼法隋唐以前より行はれ居りたるものとせば、北音にては元の韻と痕根の韻と、同用の韻法を用ゐたること敢て怪しむに足らず。されど兩者の同用、南音にてはオンの聲にて一致し、同時に北音にて

はアン・エンの聲にて稠和すと云ふは、餘りに都合好き解釋として、之を取り扱はざるを得ず。

鄭樵が七音略韻鑑にては、痕魂の韻を収めたる、第十七、第十八の兩轉を外轉に作り。此書集韻時代の宋音の感化を受けたるか如く思はるゝ所あれば、或は當時既に痕魂の韻に變調ありて、元の韻を収めたる、第二十一、第二十二の兩轉も外轉なれば、双方音調と合はすことも得られたることかと考へらるゝ所無きに非ず。されど精細に考查すれば、第十七、第十八の兩轉を外轉に作りたるは、明かに内轉の誤記なり。張麟之の指微韻鏡も無意義にして外轉の記法に従ひ、切韻指南も康熙字典も、理由無くして之を繼承せり。我國の韻鏡にては訂正韻鏡始めて、第十七、第十八、第十九、第二十の四轉を内轉に改めたり。是れ卓見なり。磨光韻鏡は初に内轉と作し、後外轉に改めたるは其意見の確實ならざることを示す。第十七、第

十八の兩轉は、其一等韻に變態の音出で來りたりとするも、二等以下の韻は明かに内轉に入るべき韻なり。右の兩轉は二等に齒音の外、他音の現出を許さざることを始として、悉く内轉の性質を具備す。其一等韻のオン、オツなること争ふべき餘地無し。濫りに之と外轉と爲すは、韻鏡の組織と根柢より破壊するものなり。痕魂、恨混、恨恩、没と元、阮、願、月との兩系の韻を對照し、韻鏡は遠き漢魏音の系統の殘存せる方音を基として作られ、隋唐の官朝にて制定せられたる、勢力ある標準音に據りたるものに非ざるものと斷定す。

其 二

歌	歌
果	哥
過	箇

陸韻、唐韻の歌留箇とオ果過との韻は、アの聲りるべかりとこと、六朝の南音にても、隋唐の北音にても、同一なりしが如し。之を寫せる我國の漢音吳音も、均しくアの聲なり。唐宋時代の梵漢對譯も亦是の聲りり。明代の音に據りたるべしと思はるゝ。朝鮮漢音も亦是なり。然るに韻鏡にては、歌留箇の韻を收めたる第二十七轉も、又オ果過の韻を收めたる第二十八轉も、共に同じく内轉に屬す。然るべきは、この兩轉をオ(ー)の聲に作らざる可からず。是れ考慮を要すべき問題なり。古韻の用法に、後古歌戈の韻に入るべき者にオの聲ありたるべきか、其迹を原ね、而して之を肯定せる者の例を擧げて、其解決を試むべし。

先秦時代の者より列記して、極めて少數ながら作例を示すべし。

驪駒歌

驪駒在路・僕夫整駕。

紫玉歌

非結成疹。沒命黃壤。命之不作。寬如之何。

楚辭大招

發政。獻行。禁苛暴。只。舉傑。壓陞。誅讖。罷。只。

暴。音簿。ヒ。近。罷。音婆。

三略

得己得人。德之路也。使人均平。不失其所。道之化也。

實誼。平屈原賦

彼尋常之汙漬兮。宜容吞舟之魚。橫江湖之鯨鯢兮。固將制於螻蟻。

蟻。音我。

劉歆列女贊

衛君不聽。後遂遁逃。許不能救。女作載馳。

逃。音徒。ヒ。近。馳。也。の聲。

馮衍顯志賦

昔三后之純粹兮。每季世而窮禍。平夏架於南巢兮。哭殷紂於牧野。
漢書敘傳曰。野曰武。怨。と押す。

班彪北征賦

惟太宗之蕩蕩兮。豈曩秦之所圖。濟高平而周覽兮。望山谷之嵯峨。

班固幽通賦

安惴惴而不朶兮。卒隕身乎世禍。遊聖門而靡敝兮。難覆醢其何補。

漢書敘傳

貳師秉鉞。身繫胡社。致死爲福。每生作醢。

同敘傳仁社。口魯と押す。

張衡西京賦

上林岑以岵巖。下蘄巖以岵巖。長風激於別隴。起洪濤而揚波。

同 鮑德誄

業業學徒童蒙求我。濟濟京河寔爲西魯。

李尤舟楫銘

相風視波窮究川野。安審懼慎終無不可。

靈光殿賦野は尚輔と押す。

漢末より魏に入り、麻馬禡の韻出現の後、上記の如き押韻を見るに至って稀なり。周代の歌文系の韻は、後漢の初期より次第に分裂し、奇義移爲馳施皮離の類は、支系の韻の方へ移り行けり。魏末晋初より麻系の韻と歩を共にして往來せる者は、即ち本系の韻なるが、其下層の流には魚模虞系の韻と、音脈の通ひたる者も潜み居りたる者と見え、折々具形と現はせることあり。

陸雲陸丞相誄

改容肅至傾蓋寵步。擊帶翩紛珍裘阿那。

道藏歌

宴果王京上、遊輪躋玄都、道遙大門中、長鑒煥翠羅。
五道息對魂、九幽罷三途、不聞孤魂聲、但聞樂與歌。
道藏歌に付常に右二例の如き韻法を用ゐたるを見る。

黃庭經

金鈴朱帶坐娑婆、調血理命身不枯。

黃庭經も亦此韻法なり。

楊方合歡詩

爾根深且固、余根淺且漙、移植良無期、歎息將如何。

鮑照鶴賦

踐神區其既遠、積靈祀而方多、引圓吭之纖婉、頓脛趾之洪誇。
降つて唐宋の時代に至りても、尚折々同様の押韻を用ゐたる例あるを見る。

韓愈元和聖德詩

皇帝檢勳、盟濯陶瓦、斤造浮屠、好此稀鯨。

聖德詩に通じて此韻法なり。是則擬古體なるべきか、或は方言を基としたるものなるべきか、何れにしても、歌の韻にかゝる讀方のありたるは否定すべからず。

蘇轍、巫山賦

覽松柏之青青兮、紛具若江上之菰蒲。惟其大之不可知兮、具惝恍之修矬。

是亦模の韻と歌の韻と同用の例なり。

以上晉以後の諸例は、古今韻略に散見せる者を、其儘借り用ゐたるものなるか、其例少しといへども、尚歌文の韻に一種の變態の聲ありたりたるを承認するに足るべし。何れにせよ歌文の韻に才の聲ありたるは事實にして、韻鏡に即ち其音の行はれたる地方にて考察せらるる歌文の韻を内轉の中に收めたるなり。随つて其音は隋唐の標準音とは一致せざりしなり。

木村正辭氏の萬葉集字音辨證に、多くの音の伊多母をイトモ、奈の音の老奈美をオイノミ、那の音の毛毛那比咎をモモノヒト、爲の音の乎爲流をヲラルに用ゐ、又磨都羅符をマツコフ、火番をコハン、和尚をラシヤウと言ふ類の例を挙げられたり。故に歌文の韻の變態音は、夙くより我國にも入り來り居りたるものゝ如し。

唐宋時代に於いて、上流に行はれ居りたる音とは異なれる所なるべきが、この韻鏡の音は、後世次第に其勢を占め來りたるものと見え、宋音として我國に傳へられたる者の中にも、下火とア水、湯婆とタンボと呼ぶが如きは、其頃には歌系の韻をオの聲にて寫したる證なり。此類の字は、奎章全韻に載せたる朝鮮音にては、アの聲なり。是に附記せる支那音はオの聲なり。現代支那音にては、官語を始として、上海音、蘇州音、其他の方音を網羅し、現今南北の地に跨りて、廣く蔓延せる韻鏡系統の音は、他の勢に壓せられて、其力

と潛の居りたる時代もありしが、其流を溯り、其迹を原ね行けば、其源の遙かに遠きを窺ひ得べし。

具 三

唐—陽 蕩—養 宕—樣 鐸—藥

韻鏡の第三十一、第三十二の兩轉にては、平聲に唐陽、上聲に蕩養、去聲に宕樣、入聲に鐸藥の韻を收む。是れ唐韻の分類に基けるなり。其入聲に鐸藥の韻を配する以上は、無尾韻の魚模虞系の韻と、豪肴蕭系の韻とに、縁故ありたるべきこと、改めて言ふまでも無し。漢魏の時代の古韻にては、入聲は無尾韻の方に属し居りたりしも、今韻にては、入聲は有尾韻の方に移りたるなり。鐸藥の韻と豪肴蕭系の韻との方は姑く措き、今鐸藥の韻と魚模虞系の韻との關係と、同系の字を擧げて對照すべし。

忌	錯	固	祚	謨	護	此の如き音にては、入聲と他の三聲と、音系を異にし、其關係全く意義を屬さず。平、上、去の三聲に、オの聲ありたりとせば、入聲も同聲にてありたるものと考へざるを得ず。但し此類のオは、オーと引く長音なりしかと思はるゝ所あり。	入聲の無尾韻の方より有尾韻の方に移りたる時代に就いては今姑く論せず、古韻にて唐陽系の有尾韻と、魚模虞系の無尾韻と、尾音を取捨して、押韻したる例あり、左に其一二の例と擧ぐ。
ラ	ソ	コ	ソ	ボ	ゴ		
惡	錯	涸	昨	莫	獲		
ア	ケ	カ	サ	バ	ク		
ク	ク	ク	ク	ク	ク		
度	著	據	路	專	瞿		
ド	テ	キ	ロ	フ	ク		
度	著	噓	略	博	瞿		
タ	テ	ギ	リ	ハ	ク		
ク	ヤ	ヤ	ヤ	ク	ク		

祭鬯祖餞祝文

食龍夾穀百虎扶行。朱雀道引玄武作侶。

曹植武帝誄

四夷賓服功夷聖武。翼帝三王神武鷹揚。

道藏歌

提携高上賓。反我素靈房。道場靈沫內。高歌登太虛。

無尾韻の方既にオー(○)の聲なりしとせば、有尾韻の方も同様にオー

ング(ong)の聲なりしと斷せざるを得ず。

唐陽系の古韻は、屢々登蒸系又東冬系の古韻と通ひたることあり。是れ短音と長音との差異にて、均しくオの聲なりしに由りてなるべし。左に二三の例を擧ぐ。

徐幹雜詩

沈陰增憂愁。憂愁爲誰興。念與君相別。乃在天一方。

薛綜駟虞頌

奮威揚德、豈弟之風、聖德極盛、駟虞乃彰。

韋昭秋風曲

秋風吹沙塵、寒露沾衣裳、角弓持弦急、鳩鳥化爲鷹。

下疆傷亡功、揚封と押す。

降つて劉宋の頃に至りても、尚同様の押韻の例あり。

謝惠連前緩聲歌

和琴日疎越、難韻能揚揚、漫漫相混同、終始福祿豐。

齊梁の頃に至りても、未だ唐陽系の韻に、激變の生じたる痕跡と見
出たこと能はず。入聲の方も六朝の末期までは、オの聲りるべか
りしこと、疑を容るべからず。

庾闡平實謹賦

雖有惠音、莫過韶韻、雖有騰蛇、終仆一聲。

入聲の聲は其聲を轉じて去聲の聲と押す。

顏延之、赭白馬賦

具服金祖、金飾丹鎖、寶鉸星鯉、縷章霞布。

入聲の鎖は其聲を轉じて去聲の布と押す。

丘遲、何吏部誄

眇望周行、式譖林壑、灑汰紛埃、擯揚流俗。

費昶、擣衣詩

昨暮庭槐落、今朝羅綺薄、拂席捲鴛鴦、開組舒龜鶴。

右は現代の南音系の音と異なる所無きが如し。

韻鏡の第三十一、第三十二の兩轉を内轉に作れるは、即ちこの漢魏音の流を酌む南音系の音なり。因つてその北音系なる唐韻と、產地を異にするを知るべし。

更に集韻に就いて考ふべし。此韻今日其所屬の字、鐸の韻の者と

と混同すれど、本來は豪肴蕭の韻の入聲なり。其原音は今音の如き
アの聲に非ずしてオの聲なるべかりしこと。古代より折々用ゐられ
たる變態押韻の例を以て之と證すべし。

三略

四民用足。國乃安樂。

史記敘傳

子羽暴虐。漢行功德。

易林

履泥汙。名困身辱。兩仇相得。身爲其辜。

楊雄解嘲

折人之柱。僞人之爵。懷人之符。分人之祿。

嵇康雜詩

下逮謠俗。蔡氏五曲。王昭楚妃。千里別鶴。

潘岳寡婦賦

省微身兮孤弱。顧稚子兮未識。

陸雲陸熙相諫

武危膏梁收俊白屋。五品時訓。民神收錄。

謝瞻答璽遲詩

狗業謝成操。復禮愧貪樂。幸會果代科。符守江南曲。

鮑照擬古詩

訪言山海路。千里歌別鶴。絃絕空咨嗟。形音誰賞錄。

樂の韻は鐸の韻と混用せられたること頻繁なり。

謝璽遲善哉行

鮑照蜀四賢詠

何遜寄褚諮議詩

落。薄。索。却。誰。尋。錄。酌。瘦。樂。
冥。雀。樂。壑。鶴。落。簿。幕。酌。錄。
薄。昨。樂。閣。作。簿。索。若。壑。錄。落。爵。鶴。

鐸の韻と既に才の聲と定めたる上は、之と同用の樂の韻も同聲なり

しと見做すこと自然なり。是れ皆南音系の音なり。
唐陽の韻は上記の如く、六朝の末期までは、南音系のオ、ンゲ、ヨ、
ンゲの聲なりしと思へるゝに、我吳音にては、之をアウ（アング）
ヤウ（ヤング）の假名に寫せり。我吳音と當時の南音と、音系の異
なりが如く見ゆるは、稍疑問の生ずる所なり。或は此吳音は北音感
化を受けたる。晚れたる時代の音なるべし。尤も儻とト方を本望。忘
茶。もにて寫せるが如き、古音の記法無きにも非ず。字音辨證には
醬。をソ、朗。をロの假字としたることありと言へり。

其 四

江

講

絳

覺

六朝の中期に於いて、東、董、送、董、冬、鍾、の腫、宋用、沃、燭との、兩
類の韻は分裂したれど、江、講、絳、覺の韻は、其兩類の中に存在して、

未だ其獨立の形を現はさざりしなり。北齊南郊樂歌に從恭雍邦同享
 廟學章に用降の押韻ありて、此時代には北地に在りても尚江の韻の
 現出せざりしを示す。梁簡文帝秋晚詩の江窓缸の押韻に、反かに江
 の韻の形を認むれど、かゝる事實ありたりとて、是れ唯東冬鍾の短
 音の中より、延びて、長音と爲りて分れ出で、現代の南音の如き聲
 を生じたるものと考ふること、適當の解釋するべし。六朝末期の詩
 教に由つて探索を試むるも、南音の方にて、別に急激の變化の起り
 たる痕跡を發見すること能はず。東冬鍾より江の分れ出でたるは、
 短音のオンゲの聲より、長音のオーンゲの聲に移りたるまでの事を
 りとす。

然るに北周の庾信述懷詩に、入聲の韻にて、
 洛。索。樂。繳。謫。託。毫。郭。藿。薄。獲。樂。涸。朔。雹。濁。鵲。索。數。郭。の押韻あり。
 剌。角。落。聲。鵲。渥。寞。實。蘂。穀。磬。穉。
 朔。雹。濁。數。は覺の韻、他は鐸藥の韻に屬す。双方に南音讀と與ふれば

別に奇とすべき所無きに似たれど、是は恐らくは北音を用ゐたることと見るべし。南音のオーンクオークは、北音にては既にアング、アフに化し居りたることと假定す。作者は南北の兩朝に事へ、詩は梁の張纘の作に和し、境遇轉變の意を述べたるものなれば、兩音何れを用ゐたるべきか、確然たる斷定は下し難し。但し南北の音聲に差異は有りたるべきも、韻法は同一にてありたるべきこと疑無し。

有尾韻の方にては、同庾信の作、袁江南賦の江王、代人傷往時詩の鴛雙。は、江陽押韻の例を示すものなり。

隋の陸法言切韻を編し、二百六韻を分類したるは、主として北音に則れるなり。周と隋とは時代相接し、周の音は隋の音と同じく北音にして、同系の音なるべかりしこと言ふまでもなし。唐の音は隋の音を承けたるものなるが、唐人の詩歌にも亦覺と鐸樂との押韻の例折々見當ることあり。

王維苦熱行

柳宗元鼓吹鏡歌

裴度唐享昭太子廟樂章

張祐讀曲歌

嶽。涸。薄。濯。廓。濁。覺。樂。
朔。角。嶽。電。握。縛。略。斷。覺。

學。樂。簫。鶴。

終。角。

右の兩類の韻は、隋唐音としては、我國に傳へられたる、ア、ク、ヤ、ク
の聲、リ、リ、しが如し。入聲の韻の聲より推して、之に對する平、上、去、三
聲の唐、蕩、宕の韻はア、ン、グの聲、陽、養、樣と江、講、絳との韻はヤ、ン、グの聲
リ、リ、しと斷すべし。唐時代に在りては、入聲と異なりて、平、上、去の
三聲の、唐、陽、蕩、養、宕、樣と江、講、絳との押韻は、筆者の認識する、未だ

其作例に見當らず。

現代に於いても尚具面影を留むる、南音系のオ、ー、ン、グ、ヨ、ー、ン、グは
漢魏音の系統を引き、北齊の頃にも、尚南音系の韻を用ゐたる作例
あるを見れば、ア、ン、グ、ヤ、ン、グの變音は、南北朝の末期、北地に在り

て起りたる現象と考へざるを得ず。爰に不審なるは、韻鏡にて、江
講發覺の韻を、第三の外轉に收め、唐陽、蕩養、宕樣、鐸藥の韻を、第三
十一、第三十二の内轉に收めたることなり。或は何れか誤記せるべ
きかと推斷したることもありたれど、第三轉は二等韻に七音を具備
すること、外轉の性質に合ひ、第三十一、第三十二の兩轉は、二等
韻に齒音のみ位すること、内轉の性質に協ふと見れば、濫りに之を
變改すること能はず。故に在の儘にて注釋を下せば、江、講、發、覺の韻
の北音系に變はりたる時代に、唐陽、蕩養、宕樣、鐸藥の韻は尚南音系に
止まり居りたることありしものと考へらる。韻鏡は乃ち此時代の音
の殘存せる地方にて製作せられたるものと見做さざるを得ず。是れ
は足と北音に進め、足と南音に留むるが如き奇觀を呈することと
なれど、他に適當の説明を與ふること能はざる以上は、斯く推考す
ること止むを得ざるなり。

唐陽の韻は、我漢音吳音共にアウ（アング）ヤウ（ヤング）の假名にて寫せり。江の韻は漢音はアウ（アング）なりと、吳音即ち古音にはオウ（オング）の聲ありたるは、先人の既に證明したる所なり。今特は其例を擧ぐる要無かるべし。北音にては江と唐陽と、其聲相近かりと見え、切韻指掌にては、唐江陽を同欄の中に置けり。洪武正韻にては江江陽に併合せらるゝに至れり。朝鮮音にては、唐江陽は앙（アング）양（ヤング）の聲なり。唐宋の梵漢對譯亦然り。現代の支那音にては官話是なり。然らば唐陽は江と共に外轉に屬すべき韻と爲るべし。切韻指南、康熙字典共に唐陽を内轉に收むるは理由無き事なり。是れ只其の據りたる所の原圖を其儘踏襲したるに由ることなるべし。

現代支那音につき、北京官話と南京官話とを對照すると、江陽の兩韻に關して、時に記法を異にする者あり。江の方、項。卷。は北話 *kuang*

南語 *hiang* 江。降。講。降。は北語 *Chiang* 南語 *hiang* 缸。缸。缸。缸。は南北共に

hiang 陽の方。香。郷。享。は北語 *hiang* 南語 *hiang* 董。疆。は北語 *Chiang*

南語 *hiang* にして、双方受音に差異あれど、母音に變化無し。此の

如く官語にては、江陽の兩韻共に北音系に屬すれど、只江の韻の方

稍變調を呈して、時に漢音讀のフンゲの聲の雜り入る者あるのみ。

入聲の韻の記法には大に注意すべき者あり。左に覺の韻と、鐸藥の

兩韻とより、各數例を出だし、南北兩語を對照せしむ。

覺の韻

北京官語、南京官語

北京官語、南京官語

棹	<i>cho</i>	<i>chōh</i>	阜	<i>cho</i>	<i>chōh</i>
學	<i>haiao</i>	<i>hiōh</i>	角	<i>chiao</i>	<i>hiōh</i>
邀	<i>mo</i>	<i>miōh</i>	駁	<i>yo</i>	<i>piōh</i>
雷	<i>pao</i>	<i>piōh</i>	撲	<i>piao</i>	<i>piōh</i>

鐸の韻

朔

shuo

shoŋ

徹

ŋieŋ

ŋieŋ

北京官話 南京官話

北京官話 南京官話

涸

hié

hióŋ

獲

hwa

huóŋ

各

gié

gióŋ

惡

é

ngóŋ

莫

mo

mióŋ

諾

nié

nióŋ

博

bo

boŋ

索

so

soŋ

作

to

toŋ

錯

tso

tsoŋ

度

to

toŋ

渠の韻

北京官話 南京官話

北京官話 南京官話

着

cho

choŋ

脚

chiao

chióŋ

却

chiék

kióŋ

略

liao

lióŋ

謹

nich

rich

錄

shuo

shio

爵

chieh

rich

省

chieh

rich

樂

yao

yoh

南北兩話の記法を通覽するに、北京音の方は覺鐸樂の三韻共に、各韻具母音に變化あれど、南京音の方は殊然として一定し、*o* の聲を以て之を寫す。凡て只入聲の勢を示す符號に過ぎずして、有尾韻よりも寧ろ無尾韻を示すことに當るべく、さすれば其聲として漢魏音の入聲に還るが如き觀あらしむるなり。入聲の響を發するとき、發音の結果、*o* の音は自然に *o* の音に變はるものか、左に非ざれば入聲には古音の姿の留まり居るものと見做し得べし。覺鐸樂の三韻は、素より其聲に差異はありたるべけれど、皆 *o* の聲を有したる者なりとは、屢々繰り返して説きたる所なり。入聲は他を離れて、獨り古音の響に戻り來りたるものと見るべきか、或は又入聲のみは

古へより其儘にて残り來りたるものと考ふべきか、尙研究を要する問題なり。北京音にては、入聲は己に全く其尾音を失ひ、*hao, qiao, chiao, liao* の如く、無尾韻に變じたる者あり。鐸の韻の、牙喉兩音の外は、概して *o* の母音と爲りたるは、古韻と形を同じうするに至れるなり。何れにしても、此變化は、音韻學者の見逃がす可からざる現象なりとす。

對照に借り用ゐたる南北兩話の記法は、其出處の同じからざる書に據りたるを、稍遺憾とする所なり。

其五

豪肴宵蕭
一ニ三四

皓巧小篠
一ニ三四

號效笑嘯
一ニ三四

此類の諸韻は、其古音を考ふるに、今音を以て擬し難き者多し。今右に變態押韻の例を擧げて、其性質を窺ふべし。

楚辭大招

青春受謝。白日昭只。春氣奮發。萬物遽只。

史記龜策傳

聖人得之。以爲大寶。大寶所在。乃爲天子。

同 敘傳

武王牧野。實撫天下。幽厲昏亂。既喪鄴錫。

下音戶。

易林

衣裳顛倒。爲王來呼。

劉向九數

顏黢黑。以沮敗兮。精越裂而衰毫。裳旒旒而含風兮。衣衲衲而掩露。

班固東都賦

申舊章下明詔。命有司頒憲度。

漢書敘傳

受命之初，贊功剖符。夷世弘業，爵土廻昭。

崔駰達旨

魯連辨言以退藏，包胥單辭而存楚。唐且畢顛以悟秦，甘羅童身以報趙。

傅毅洛神賦

崑山美玉，渤海明珠。金銀瑇瑁，翠鷺貂旒。

李尤平樂觀賦

或以馳騁，覆車顛倒。烏獲扛鼎，干鈎若羽。

王逸九思

意逍遙兮欲歸，衆穢盛兮杳杳。思哽銛兮詰涕，汎瀾兮如雨。

陳琳馬腦勸賦

帝道匪康，皇鑒元輔。顧以多福，康以碩寶。

徐幹齊都賦

琴梗林燎園草。驅禽翼獸。十年只旅。

張載七哀詩

狐兔窟其中。蕪穢不復掃。頽墮並壑發。萌隸營農圃。

豪者霄蕭の韻に介裂を生じ、次第に變化の生じ來りしものと見え、晉以後に至りては、上記の如き押韻を見ること至つて稀なり。此系の韻にオの聲ありたるべきは、既に説きたるが如く、同系の入聲の樂の韻にオの聲ありたると符合す。我古書の假名に、高をコ、刀をト、保をホ、毛をモ、逞をヨにて寫したるが如きは、是れ全く漢魏音なり。現今行はるゝ所の廣東音には、此聲の残存するもの、如し。豪者霄蕭の入聲の韻の大部は樂の韻と爲りて、鐸の韻に伴ひ、殘部は沃の韻の中に留まり居りたるが、覺の韻の現出するに當りて、多數は其中に入り、遂に江講、絳の韻と共に、北音系の韻に移りたるは、前に既に述べたるが如し。

韻鏡にては豪有宵蕭皓巧小篠號效笑嘯の韻を、第二十五、第二十六の外轉に配す。然るときは、右の諸韻は、北音系に屬する、我漢音類似の音と爲るべし。朝鮮音は我吳音（古音）と同一なる漢魏音系の音なり。無尾韻時代の豪有宵蕭の入聲の一部は、前記の如く樂と爲りて分れて鐸に伴ひ、有尾韻と爲りても尚内轉に留まれば、他の一部は覺に入りて、外轉に移り、前に之と同籍なりし無尾韻にまで、其影響を及ぼしたるか如き觀ありて、豪有宵蕭皓巧小篠號效笑嘯の諸韻は、北音系の聲と爲りて、外轉に移りたるもの、如し。蓋し韻鏡の製作時代に、此音の行はれ居りたる地方のありたるべきこと疑無し。韻鏡の組立は、漢魏音の系統に則りたる所多けれど、第三轉と、第二十五、第二十六兩轉とは明かに之に反するは、奇なりと謂ふべし。

其 六

廣韻にて獨用同用と爲す所の韻と、同類に對する韻鏡の配置と、往々其根柢を異にする者あり。

廣韻にて佳皆の兩韻は同用と爲し、咍灰の兩韻は之に與らず。韻鏡にては、皆を第十三轉の咍、竝に第十四轉の灰の下に置き、咍灰を一等韻、皆を二等韻、齊を四等韻と爲して、其位を保たしむ。漢魏の古韻にては、佳と皆とは別部に屬す。咍灰の皆と通へるは、六朝時代の韻の用法を傳へたるものなり。

潘岳寡婦賦

顧影兮傷摧、聽響兮増哀。遙逝兮逾遠、緬邈兮長乖。

下顧。迴。開懷と押す。哀。開。口。咍。顧。迴。口。灰。乖。懷。口。皆。

何承天、宋鼓吹鏡歌

芳樹生北庭。豐際正徘徊。翠顙凌冬秀。紅葩迎春開。
 下諧階樓閣。悽懷桂。平押韻。開。日。昭。徊。日。仄。諧。階。悽。平。日。皆。樓。閣。悽。桂。日。齊。

江淹休上人怨別詩

青鑪絕沈煉。綺席生浮埃。桂水目千里。因之平生懷。

庾信商調曲

專精一致金石爲之開。動其兩心。妻子恩情乖。

廣韻にては、豪肴の兩韻は各獨用なり。宵蕭は尚更に之に與らず。
 韻鏡にては、第二十五轉に豪肴を一等韻、二等韻として收め、宵蕭を三等韻、四等韻として其下に連ぬ。この四韻は古へ同源より出でたるものなれば、韻鏡の配置は、漢魏音の流脈を傳へたるものと謂ふべし。六朝の中期には、宵蕭は一韻として獨立し、次いで其末期に於いて、豪肴の兩韻は分離せり。

蔡邕郭林宗碑文

懿乎具純確乎具操。洋洋搢紳言觀其高。
下教。招。妙。曜。と押す。操。高。日。豪。故。日。效。招。日。蕭。妙。曜。日。嘯。

劉楨魯都賦

畫藏宵行。俯仰吟咆。周制白盛。今也維縹。

潘岳西征賦

雖五方雜會。風流溷淆。情農好制。不昏不勞。

陶潛挽歌

荒草何茫茫。白楊亦蕭蕭。嚴霜九月中。送我出遠郊。

廣韻にては、庚耕清の三韻は同用にして、青は獨用なり。韻鏡にては第三十三、第三十四の開合兩轉に庚清、第三十五、第三十六の開合兩轉に耕清青を收む。清は兩轉に跨る。漢魏の古韻にては、庚と耕とは別系にて、耕と青とは同系に屬し居りたるなり。故に韻鏡は

廣韻と異なりて、其配置漢魏音の面影を寫し留むるものゝ如し。
庚清同用の押韻は例多ければ、省きて擧げず。尤の諸例は韻脚のみ
を記す。

陸雲爲顧彦先贈婦詩

盧諶答魏子悌詩

顏延之遊蒜山作

江淹登廬山香爐峰詩

紫情靈傾盈星押韻。紫情傾盈は清靈星。

は青。

腋績跡翮益昔易厄績役隔蹟壁押韻。翮厄
隔蹟は麥腋跡益昔易績役は昔績壁は錫

一麥昔錫は耕清青の入聲。

溟成京營靈明垣覺英情征氓耕埤韻京明
央氓は庚覺耕は耕成營情征は清溟靈垣

は青。古韻にては庚所屬の四字は他より

移り入りし者なり。

經靈青冥驚生情名旌押韻。古韻にては驚

生は耕又青に入るべき字なり。

其七

麻 = 三四

馬 = 三四

禡 = 三四

韻鏡の第二十九、第三十開合兩轉に麻、馬、禡の韻を收む。拙著韻鏡音韻考に外轉等位の母音を定め、一等をア(a)、二等をヤ(ya)、三等をエ(e)、四等をウ(u)の聲と斷せり。上記の兩轉には一等韻無し。其位を占むる者は二等のヤと三等のエとの拗韻と四等のエの直韻となり。左に數例を出だして、之に韻鏡推定の音を附すべし。
。四聲の符號は略す。

二等

造詐 *tsa (tse)*

三等

通者 *tsa (tse)*

四等

嗟借 *tsa*

沙灑

sa (sya)

社会

sa (sya)

些謝

sa

廣韻の反切に徴するに二等字と三等字又は三等字と四等字との間に

音の差別あるは、之を辨知すること容易けれど、其音の性質に至りては、韻鏡の音に符合するや否や、之を判別すること困難なり。漢音は二等字をサの直音、四等字をシヤの拗音、吳音は二等字をシヤの拗音、四等字をサの直音、漢吳兩音共に三等字をシヤの拗音を以て表はすを以て法と爲せど、皆アの母音有ること韻鏡と同じからず。朝鮮音は漢音に類すれど、尚變化あり、全章全韻にて朝鮮音に附記する支那音は概して、二等は外(ə)の聲、三等は外(ə)の聲とれど、四等にはo(○)の聲を用ゐたるを見る。

現代支那音にては、官話と廣東音とを寫せる羅馬字を以て之に當つれば、二等の渣詐は官話、廣東音共に *cha*、沙灑は官話、廣東音共に *cha*、三等の遮者は官話、廣東音共に *che*、社舍は官話 *chie*、廣東音 *che*、四等の嗟借は官話 *chie*、廣東音 *che*、些謝は官話 *chie*、廣東音 *chie*、として、拗直兩聲及び母音の配置、筆者の韻鏡の等韻に對する

意見と恰も符節を合するが如し。是れ他無し。韻鏡の據りて以て基
としたる唐代の音の殘存して、其系統の遙かに續き來り、現代音と
屬りて其形を表はせらるなり。元來支那は古し、地は廣し、或は民
族の移轉或は風俗の變遷に伴ひ、音韻の如きは、或は斷絶し、或は
繼續し、或は混化し、或は發展し、代々國々、多數の音の表現する
は、決して怪しむべきことに非ず。漢魏音、六朝音、隋唐音などと
稱するは、只其時代に勢力ある標準音を指すに過ぎざるのみ、精密
に探索すれば、現代音の中にも、隋唐音の殘存せるのみならず、
尚往々漢魏六朝の古音の系統を發見することあるなり。一音其勢力
を失へば、他音の下に潛み隠れ、他音其勢力を失へば、前音撞頭し
て再び其形と現けすは、普通の現象なれば、多數の系統の音の相接
觸し、錯合混化する場合には、現代支那音の如き結果を生ずるに至
るべきは、決して不可思議の事に非ざるなり。

總括

韻鏡と唐韻とに七音三十六字母と四聲二百六韻とを同じうし、兩々相
伴して唐代の音韻を代表し、且つ韻鏡は全然唐韻に附隨して出でた
るものゝ如く見ゆれど、細かに考查するときは、音韻共に列擧した
るが如き差異あり。韻鏡の音を以て洛陽長安の北音なりと唱ふる者
あれど、輕々しく之に同意すること能はず、さればとて之を江左音
なりと斷する者もあれど、亦容易く首肯すること能はず。

韻鏡は遠く漢魏音の流派を斟み、且つ當時の南北兩音の、接觸せる
地方に於いて考察せられたるものゝ如し。其音は、南音系に屬する
者に餘故多かりしが如く見ゆと雖も、必ずしも之を江左音なりと斷
する要無かるべし。現代廣く行はるゝ所の官話の中にも、漢魏六朝
の古音に類する者の、往々散見することあるは事實なり。且つ其外

に尚南北両音には直接の關係無かりしかと思はるゝ、韻鏡獨特の音も、現代音の中に、見當る者あるか如し、筆者の狹隘なる知識にては未だ韻鏡の産地と的確に斷定し、之を明白に指摘すべき權能を有せず。韻鏡の産地の明かならず、又其書の廣く世に知られざりしは、或は空しく一地方の佛家の手に潜みて、深く秘藏し居られたるに由ることりるべし。

此篇に於いて散記せる古詩押韻の例は主として拙著「支那古韻史」より採萃せり。論據も亦之を基とする所少からず。

大正十五年十月一日印刷
大正十五年十月十日發行

（製本實費
金壹圓拾錢也）

東京府荏原郡平塚町戸越二八二

著作兼發行者 大島正健

東京市神田區北神保町二番地

印刷者 佐藤齊一

東京市神田區今川小路三丁目十七番地

賣捌所 松雲堂書店

正誤

附記序文

三行

書齊ハ書齋

一八頁

六行

唐韻以前ハ廣韻以前

三二頁

八行

吉辭ハ古辭

三六頁

一〇行

鳩靜ハ鳩鵲

五二頁

五行

麻島ハ麻馬

七三頁

一行

(印刷) 楚辭大招

同

二行

(印刷) 青春受謝白日昭。只著氣奮發

七五頁

六行

入聲ハ入聲

八二頁

一三行

對スハ對する

(二一頁)
八四頁

五行
二行

同ウスハ同じウす